



前列左から松村富美子さん、吉野恭代さんと孫の白川結菜ちゃん、竹本眞由美さん、後ろは松村晋児さん



アルファビクスの問い合わせは吉野さんまで。(mobile 090-8837-1427)

「います」とインストラクターで福原地区に住む吉野恭代さん。参加者の皆さんも「ストレッチ終了後は体が軽くなります」と口をそろえます。

ところで、メンバーの中の松村晋児さんと富美子さん夫婦についてのちよいネタを拾いました。熊本市内で生まれ育った2人は小学校の同級生。ご縁あって結ばれ、33年前に富美子さんの母方の実家がある福原地区に移住。ちなみに松村家は代々養子縁組で家



「ヤンタマ」から左折した道沿いに、ひまわり畑を見つけました

県道熊本高森線から寺迫地区にある、九州産交バス木山営業所を通過して、さらに南下した先の道筋に広がるのが福原地区です。

左手の特別養護老人ホーム「いこいの里」を過ぎ、今回の散歩の目印とするのが、右手にある現在は閉店している「ヤングタマチ」の店看板

今年も順調、梅仕事

（半分は外れていますが）。かつて小さなスーパーとして、地域の人たちに愛されてきた場所だそうです。

その「ヤンタマ」から左折し道なりに上って行くと、自宅敷地内に大粒の梅を天日干しにした光景に遭遇。それにしても、家庭用にしては量が多すぎる気がします。

「梅干しの加工品を作っているんですよ」と教えてくれたのは有川英雄さんです。今から18年前、妻の浅



大粒の梅干しが天日干しされていて、その量にびっくり

名を守り、晋児さんも婿養子として入りました。

「地域の皆さんはいい方ばかり。こちらに越した時からすぐに溶け込みました」と、松村さん夫婦は笑顔で浮かべました。

吉野さんの野球人生

「趣味は洗車」と言っってはばかりない福原区長の吉野洋一さん。先述のアルファビクス・インストラクター恭代さんの夫で、自宅の小屋には洗車用の道具はもちろん、車内用掃除機まで用意するというこだわりぶりです。

さらに、吉野さんがこれまで関わってきた野球人生についても興味を引かれます。聞けば、少年時代から野球漬けだったという吉野さん。社会に出てからは川崎製鉄水島硬式野球部に所属し外野手として活躍。家庭の事情で帰郷すると、県内の企業の軟式野球部で35歳まで現役を続けました。それだけでは終わらず、40歳以上部門の国体選手に選拔されたり、勤務会社の野球部監督を務めたりするなど、定年直前まで野球に携わってきたそうです。

「これまでの人生の8割を野球に打ち込んできた気がします。好きな野球を散々やれて幸せでしたね。今



町の南方に広がる福原地区と南地区。昔ながらの家庭並みのどかな風景が残り、どこか懐かしさを覚える場所です。

水分を十分に取り、暑さ対策も万全の夏の散歩。今回も優しい笑顔がたくさん待っていました。

子さんと2人で50アールの広さの畑に南高梅の苗木を植樹し、梅の栽培から始めたそうです。それまでは造園用資材などを取り扱っていた英雄さんでしたが、勇退後の夫婦の楽しみにと梅干し作りに着想したそうです。



左から有川さんの孫で小学5年生の琉玖くん、英雄さん、浅子さん



高台にある吉野さんの自宅の庭から、金峰山に沈む美しい夕日が見れるそうです



洗車と野球人生を語ってくれた洋一さん

は野球から離れて、洗車に打ち込んでます（笑）。好きなことに夢中になる性格は昔から変わらんです」と吉野さんは屈託のない笑顔向けました。

震災後の社寺の修復に携わって

令和6（2024）年4月号の寺中編で紹介した、津森神宮拝殿の修復工事に携わっていた西嶋工務店の営む、西嶋武さんに再会。

これまで西嶋さんは後継者で長男の大輔さんと、町内で被災した社寺



上／有川さん夫婦が作る、ふっくらとした軟らかい果肉の梅干し
下／英雄さんが手削りで製作している竹箸

「黄色く熟したのを収穫して塩漬けにすると、2日で梅酢がたつぷりと上がります」と浅子さん。梅干しの果肉はふっくらとして軟らかく、深紅のシソ色に染まっています。毎年、有川さん夫婦の梅干しを待ち焦がれるファンは多く、今年の梅仕事も順調に進んでいるようです。

アルファビクスでストレッチ

福原公民館で、「アルファビクス」というストレッチに汗を流す人たちに会いました。ゴムバンドを使い、腹式呼吸を整えながらゆっくりと体を動かすというもので、ヨガをベースにした運動だそうです。

「ゴムバンドが体の負荷を和らげ、中高年や高齢者の方々の運動にも向



西嶋さんが彫った装飾細工の木鼻



変わらない西嶋さんの優しい笑顔に癒やされます

の修復工事を担ってきました。「新しく建て替えるのと違い、文化財の修復工事は慎重を極めます。伝統的な手法も取り入れ、破損した部位の補修や補強を行い再利用するなど時間と手間もかかりましたが、立派に復元された建物をあらためて眺めると感慨深いものがあります」と西嶋さん。

「これは社寺建築には欠かせない装飾部位で、ずいぶん前に私が手彫りしたのですが、こうした経験も生かすことができました」と西嶋さんが見せてくれた木鼻には、日本の伝統建築の技が光っています。工房の敷地に大きな丸太が4本寝かせてあります。「赤井地区の日枝神社の鳥居を新しく作り替える資材です」と話す西嶋さんの元氣な笑顔から、この町の復興が一步一歩進んでいることを感じます。